

文化價值體系問題 (三)

米田 庄太郎

第二節 文化哲學に於ける價值體系問題

夫れ文化哲學なる語は、近來獨逸の學界に於て盛に使用されて來たものである。而して嚴密に云ふ文化哲學なるものは、カントの哲學から生れたものであるとも云はれて居る。併し廣義に解する時は、文化哲學なる語の新しきに拘らず、實質上から考へて、夫れは昔より存在せるものであると見ることも出来る。此處には文化哲學の概念の詳しき規定や、又其の起源に就て論ずる暇はないで、とにかくカントの哲學から考察し始め今日文化哲學に於て最も根本的なる問題の一と認められる文化價值體系問題の考察の發達を概論して見ようと思ふ。

今カント自身は明らかに意識して居たかどうかは問題であるが、今日吾人が彼の哲學の全體を考察して見ると、彼は諸般の文化價值を批判主義的に考察して、夫れ夫

れの主要なる文化價値の絶對的妥當性の基礎を究明せんと企てたと認めることが出来る。要するにカントは先づ純粹理性批判に於ては學問、實際理性批判に於ては道徳、判斷力批判に於ては藝術、而して宗教哲學に關する著作に於ては宗教等の、夫れ夫れの文化價値を批判主義的に考究し、其の絶對的妥當性の基礎を究明し、以て文化大構成物の批判主義的考察によりて、人生の意義を闡明せんと企てたものと認め得られると思ふ。然らば彼は文化價値體系問題を如何に論じて居たかと云ふ問題は、今日文化哲學を研究しつゝあるものの頭には、自から起つてくるのである。是れ此の問題は文化哲學の最も根本的なる問題の一であるからである。

併し彼は此の問題を意識的に考へて居たとは思はれないから、隨ふて此の問題の意識的、組織的論究は彼の著作の何れに於ても見出し得られようとは思はれない。余自身はまだカントの全集に就て詳しく研究して居ないから、余自身の研究からしては、右の如くに斷言することは出来ないが、併し文化哲學の見地からカントの哲學を詳しく研究した諸家の説によりて見ると、カントはまだ文化價値體系問題を組織的に論述して居たとは思はれない。(拙著「新理想主義の歴史哲學」後篇(一)第一章参考)さはれ彼は實際理性の優位を認めて居たことや、又歴史哲學に關する彼の諸著作に

於ける彼の文化概念から考へて見ると、彼は倫理的價値を最も重要視し、之れを文化價値の最上位に置いて居たと推察することが出来ると思ふ。しかも彼は其の他の文化價値を、如何に倫理的價値の下に、位階的に排列しようとしたかは明らかでない。恐らくは彼は只倫理的價値に最上位を認めただけで、其の他の文化價値を位階的に排列しようとは考へなかつたのであらうと思はれる。

カントに次いでフイヒテは倫理的價値、又シエリングは始めには藝術的價値、後には宗教的價値を最上價値と認めて居る。併し其等の哲學者にありても、其の他の文化價値が如何に位階的に排列されるかは、詳論されて居ない。而してヘーゲルに至つて、始めて一切の主要なる文化價値の位階的秩序が組織的に樹立せられ、整然たる文化價値體系が確立されたと思はれる。此處にヘーゲルの文化價値體系論に就て詳しく述べる暇はないが、要するに彼は精神の辨證論的發展の原理に基いて、文化價値を根本的に、哲學、宗教、藝術、倫理、法律及び道德と云ふ位階的順序に於て排列したのである。

右に概論せる處によりて察せられる如く、カント後の獨逸理想主義哲學に於ては、特定の文化價値を最上價値と認め、而して他の文化價値を其の下に、一定の順序に於

て排列せんとする傾向が発見されるのである。つまり位階的に文化價値の體系を立てんとする傾向が認められるのである。而して目的論的に考察する哲學の見地から見れば、夫れは當然發達すべき傾向であると思はれるが、併しそれと同時に何れかの一の文化價値を最上の地位に据へ、之を完全に實現することを以て、文化の最高目標と認めんとする企圖の、到底成功し得ないものであることも亦、明かに理解されるところと思ふ。是れ何れの文化價値を最上價値、最高目標となさんとする文化價値體系論も吾人を十分に満足させることが出来ないで、雄大壯麗なるヘーゲルの文化價値體系論も、遂には崩壊したからである。然らば輓近の新理想主義哲學に於ては、文化價値體系問題は如何に取扱はれて居るか。

輓近の新理想主義哲學の諸方針中、特に價値體系問題を重要視するものは、價値論的批判主義とか、價値哲學とか稱せられて居るものである。それで余は此處に主として此の方針の新理想主義哲學者の説に就て、價値體系問題の發達を論究して見ようと思ふ。

今價値論的批判主義或は價値哲學の方針に於て、始めて詳細なる價値體系を立てたるはミュンステルベルヒ氏であると思ふ。而して同氏は千九百八年に公にされ

た「價値の哲學」(Philosophie der Werte. 1908)に於て、之を詳論されて居るのであるが、此處に極簡單に其の概要を述べて置く。

夫れミュンステルベルヒ氏の説によれば、より以上に遡ることの出来ない根柢は、快感とは全く關係のない一の原本的業ワフであつて、夫れが吾人の存在に永久な意義を與へるのである。夫れは即ち一の世界が存在し、此くて吾人の體驗内容は吾人に對して、常に一の體驗として妥當す可きものであるのみならず、自から夫れ自身に於て獨立に固持すると云ふ意志である。此の意志は自由の一所作にして、而して一の獨立なる世界を肯定する此の作用は、必然的に一切の價値を包有するのである。體驗が一の獨立なる世界として妥當することを欲する人は、各體驗が彼の體驗の流れの中に自から固持することを願望しつゝ、之を把握せねばならぬ。若し各體驗が夫れ自身に於て孤立して居て、只跡方もなく消へるが爲めにのみ現はれるものならば、吾人は全く何等の世界をも有しないであらう。然るに自から己れを固持すると云ふことは、つまり只各々が新しき體驗に於て繰り返し、此くて新しき目的に役立つ一の新しき體驗が、古き體驗に挿し込まれることに於てのみ、成立し得るのである。然るに夫れが即ち吾人が實現と稱する處の關係であるので、而して各實現は體驗するも

のに對して一の満足である。吾人は體驗が一の夢に過ぎないものでなく、夫れ自身に對して存立し、夫れ自身に於て妥當する一の世界を表現することを意欲して體驗に接するならば、體驗内に於ける各反復各持續、要するに總ての自から同一なるを表示することは、意志を満足させねばならぬ。而して此の世界への意志は箇人的快不快と全く關係を有しないものであるが故に、此の満足は世界を意欲する總ての一般的に有り得る意識に對して、其の儘にて妥當せねばならぬ。然るに其の儘にて妥當する満足は統價値である。此くて變化する體驗間の同一性の關係が、其の儘にて價値あるのである。而して只かゝる同一性が現はれる限りに於てのみ、世界が其の儘にて價値あるのである。然るに只かゝる同一性が現はれる限りに於てのみ、體驗されたるものが、一般的に一の獨立な、現實な世界である。此くて價値の世界は唯一の眞實な、自から己れを固持する世界にして、而して一般的に世界を認める各人に對して、體驗の自己固持より自から生ずる一切の關係は、其の儘にて價値あるものであらねばならぬ。是に於てか、吾人が此の世界肯定の作用によりて何が設定されるか、或は換言すれば世界の自己固持は如何なる仕方にて行なはれ得るかを問ふ時に、價値の體系は自から成立せねばならないのである。

今體驗が獨立なる世界として己を固持す可く、かくて常に新しき體驗に於て自から己を實現し、隨ふて經驗の變動中に於て相互に同一的に表はる可くは、四重の關係が要求されねばならぬ。第一には各部分が體驗の變動中にありて自から夫れ自身と同一的に持續せねばならぬ。第二には諸異の部分が或意味に於て相互に同一的であり、此くて相互に一致し、從ふて自から夫れ自身と一致せねばならぬ。第三には各部分は又夫れが他となることに於て、夫れ自身と同一的であることを固持し、かくて活動に於て自から己を顯現せねばならぬ。かくの如くにして體驗の混沌界に於ける此等三重の同一性は三重の自己保持體驗に於ける與へられたるもの、三重の實現、隨ふて體驗するもの、三重の超箇人的満足、隨ふて三重の價值、即ち保持の價值、一致の價值及び活動の價值 (der Wert der Erhaltung, der Wert der Überstimmung, und der Wert der Befügung) を與へるのである。併し世界が自から完全に己を固持す可くは、此等の價值は又再び相互に同一的であらねばならぬ、即ち一が他に於て實現せねばならぬ。此處に始めて超箇人的意志に其儘の最後の満足が與へられる。そこで吾人は第四の價值、即ち完成の價值 (der Wert der Vollendung) を獲得するのである。

此くて一般的に一の世界が可能であり、而して單なる體驗が征服される爲めには、

相互に補充する四つの要求があるのである。世界を肯定する人は、體驗の自己固持の保證として世界の保持、一致、活動及び完成を切望せねばならぬ。此等四種の形式の各々に於て、體驗は眞なる世界の一片として實現する。此の實現を求めると體驗の意欲は、體驗されたるものゝ保持、一致、活動及び完成が得られるや否や、箇人的快感及び不快感を離れて、満足を見出す處の其の純意欲である。箇別體驗はあるがまゝでは價值に關係がない。併し夫れが自から己を固持し、此くて一の世界を建てると云ふことは、其の儘で價值あるものであり、而して吾人の手探りする意欲が、此の實現の世界に加入し、體驗が自から己れ自身と同一的に實現する處では、一の純意志が永久に満足せられ、一の價值が獲得されるのである。

かくて眞なる世界は、吾人の體驗が自から夫れ自身を固持し、而して獨立なる自己存在に於て自から實現する限りに於て、吾人の體驗の世界である。但し吾人の體驗は體驗としては只吾人に對して存在するだけである。純價值の妥當性に關する吾人の問題は、只此の眞なる世界にのみ結び附けられ得るので、而して今や此の問題を否定するは愚であることは明白である。此の眞なる世界は純價值を以て充たされ居る。是れ眞なる世界はまさしく、吾人が體驗の自己存在を肯定し、與へられたる

ものゝ獨立なる實現を要求することによりて、吾人の建設する處の世界であるからである。此くて眞なる世界其の物は、一般的に只夫れが右の要求を充たし、夫れによりて純意志を満足させる限りに於てのみ、妥當性を有するのである。即ちさうである限りに於て眞なる世界は其の儘で價值あるのである。吾人が求め、吾人が其の無制約的價值を認めんとする世界は、價值の妥當性が既に前定されて居る一の世界、其の建設に對して純價值が唯一の先天者である處の一の世界である。吾人の體驗は吾人の體驗として無であるか、又は夫れ自身に對して存立する、其の儘で價值ある一の世界であるかである。第三のものはあり得ない。一の體驗(夫れは外界の體驗であるか、主觀間或は共界の體驗ミトウニエルトであるか、内界の體驗であるかを問はず)が經驗に於て同一的に實現され、かくて其の獨立なる意義を表示する何處に於ても、體驗の自己固持を求める吾人の純意志は充足され、而して夫れによりて吾人に對しては一の純満足、世界に對しては一の純價值が得られるのである。

吾人は體驗を自己存在に高める右の業ワザを、素朴的に行なふ。吾人が事物或は意識物に特有の存在價值を附する時に、既に右の評價が行なはれて居るのである。併し生活の此の素朴的評價から、自から夫れ自身を固持し、夫れ故に其の儘で價值ある世

界の建設に對して、目的を確かめたる意欲を以て行なはれる目的意識的努力が發達する。是れまさしく文化の仕事である。かくて吾人は何處に於ても素朴的生活價值と目的意識的に設定されたる文化價值とを區別せねばならないであらう。而して此等二大部類の各々に於て、保持價值、一致價值、活動價值及び完成價值の四大領域が區別される。更に其等の八領域の各々に於て又三種の別が立てられねばならぬであらう。蓋し吾人は常に外界、共界及び内界の體驗を區別せねばならぬからである。此くて吾人は八重的三價值部類の一體系に到達する。しかも總て此等の二十四種の價值は只、吾人の體驗が一の獨立な、自から夫れ自身を固持する世界に屬すると云ふ、一の價值の諸分枝に外ならないのである。

要するに價值は總て、實在は存立す可きものであると云ふ要求の結果として生れるものにして、夫れは世界の自己固持或は自己肯定 (*die Selbstbehauptung der Welt*) を表現する。而して先づ直接に設定されたる價值、即ち生活價值と、目的意識的に創造されたる價值、即ち文化價值との二大部類に分たれる。又此等の價值が現はれる領域は三重である。即ち外界(客觀事物)と共界(主觀相互の世界)と内界(箇別主觀)とである。更に其等の三領域に現はれる價值の二大部類の各々に於て、四種の價值が區別

される。即ち保持價值と一致價值と活動價值と完成價值とである。而して此等四種の價值は又論理的價值、審美的價值、倫理的價值及び形而上的價值と稱することが出来る。蓋し論理的價值は世界の自己保持から自から生まれ、又審美的價值は世界の自己一致の要求から、又倫理的價值は世界の自己活動から、又形而上的價值は世界の自己完成から、夫れ夫れ自から生れるものであるからである。尙ほ價值の二大部類即ち生活價值及び文化價值の各々に於て右の四種の價值が右の三範域に於て現はれることによりて生ずる、諸種の價值形態の一般を簡單に説述すると左の如くである。

生活價值にありては、先づ論理的價值は存在價值 (Daseins-Werte) にして、夫れは是認 (Anerkennung) の對象である。而して其の現はれる範域の差異に従ひ、外界にありては事物、^{ザイン}共界にありては意識物、^{ヴェーゼン}内界にありては評價 (Bewertungen) となる。次に審美的價值は統一價值或は一致價值 (Einheitswerte) にして、夫れは歡喜 (Freude) の對象である。而して外界にありては諸事物の一致は調和を^{ハルモニー}生み、共界にありては諸主觀の一致は愛を生み、内界にありては主觀が己れ自身との一致によりて幸福を生ずるのである。次に倫理的價值は發達價值にして、夫れは^{エタペーピング}高上の對象である。而して事物に關して

は生長 (des Wachstums)、其界或は主觀界に關しては進歩 (der Fortschritt)、箇別主觀或は主觀夫れ自身に關しては自己發展 (die Selbstentwicklung) が生ずる。終りに形而上的價値は神價値 (die Gotteswerte) にして、夫れは信仰の對象である。而して事物界に對しては創造の價値、主觀界に對しては天啓の價値、主觀の内界に對しては救濟或は解脱 (die Erlösung) の價値が生來する。

目的意識的に創造される價値、即ち文化價値にありては、先づ論理的價値は結合價値 (die Zusammenhangswerte) にして、夫れは認識の對象である。而して夫れは事物の世に對しては自然、主觀界に對しては歴史、内界に對しては理性或評價の結合體系を生む。次に審美的價値は美價値 (die Schönheitswerte) にして、夫れは己を献げること (die Hingebungs) の對象である。而して事物界は造形藝術に導き、主觀界は詩歌に、内界は音樂に導くのである。次に倫理的價値は作業價値 (die Leistungswerte) にして、夫れは評價或は尊重 (die Würdigung) の對象である。而して事物の世界に於ては經濟、主觀界に於ては法律、内界に於ては倫理 (die Sittlichkeit) が生來する。終りに形而上的價値は基本價値 (die Grundwerte) にして、夫れは確信の對象である。而して事物界にありては世界全體 (das Weltall)、主觀界にありては人類、内界にありては超我 (das Über-Ich) が生れ

る。形而上的價値は餘他の三種の價値の合致を表現するものにして、而して此の任務を盡くす生活價値は宗教に於て與へられ、又文化價値は哲學に於て與へられるので、宗教及び哲學の兩者は、經驗し得られるものゝ限界を越へて進まんとするのである。併し上に述べし諸種の價値は、相互に對して同等的に並立するものにして、彼等は相互に従屬するのではない。此くて根元は其等の價値の後ろに存するのである。而して此の統一する價値は聖なるもの (*das Heilige*) である。一切の價値は此の最後の價値の表現形式或は活動である。夫れは一の超我、一の業である。總て箇々の價値は此の根本努力或は欲求 (*das Urstreben*) の部分である。世界は一の業である。此の業は全體に於ては結合統一及び作業 (*Zusammenhang und Einheit und Leistung*) を包括するのである。

尙ほ余はミュンステルベルヒ氏の説を、一目瞭然たらしめる爲めに同氏の作製されたる一の圖表を左に掲げて置く。

純 價 値

(世界の自己固持)

(純満足の對象)

倫理的價值 (世界の自己保持)	審美的價值 (世界の自己一致)	倫理的價值 (世界の自己活動)	形而上的價值 (世界の自己完成)
存在價值 (是認の對象) 事物 (Wesen) 評	統一價值 (歡喜の對象) 調愛幸	發達價值 (高上の對象) 生進自己發達	神價值 (信仰の對象) 創天救濟 (解脱)
生活價值 (直接に設定された) (為的價值) 外共内	美價值 (献己の對象) 造形藝術 造詩音樂	作業價值 (評價の對象) 作業 經濟法倫	基本價值 (確信の對象) 基世全體 基人超類
文化價值 (史的意識的に創造) (されたる價值) 外共内	自歷史性	自歷史性	自歷史性

軌近の價值哲學的新理想主義の方針に於て、始めて詳細なる價值體系を立上られ

たるミュンステルベルヒ氏の説の大意は、以上述べしが如きものであるが、夫れによりて見ると、同氏は諸價値の間に位階的秩序を立てると云ふことには、別に心を煩はして居ないと思ふ。要するに同氏は一切の純價値は、最原本的なる業ノブから必然的に生まれ、同等的に並立するものとして、之を一定の秩序に於て組織的に排置せんとするのである。しかも世界の自己完成の要求からして、形而上的價値が生まれ、而して形而上的價値は他の三種の價値の合致を表現するものにして、又此の任務を盡くす生活價値は宗教に於て與へられ、又文化價値は哲學に於て與へられると見るに於いて、同氏の價値體系にも矢張り、位階的秩序の主旨が含まれて居ると思はれる。而して目的論的に考察する價値哲學に於ては、夫れは避け得られない傾向であると思はれる。尙ほ最近に詳しき價値體系を立てんと企だてたるリッゲルト氏は、一定の見地より見て價値を位階的に整列するに非らずば、價値體系は完成されたとは云はれないと考へ、大に位階的秩序を重要視して價値體系を立てんとして居る。それで余は次に同氏の價値體系論を考察することゝする。(未完)